

も亦不詳〔申略〕閩中の商船に鯧魚似馬鮫而小、有鱗大者僅三四寸と見えしもの、即是イワシ也、過にし比
 かりしに、譯人の老いたるが、イハス也といひしによりて、其請ふ所をゆるしき、後には只此國の方言
 省閩中の俗、同じく此物な呼びて、イハスといひしに、同じく鯧魚といふなり、此國の方
 に倣ひて云ひしなり、鯧魚は、倭名鈔に引食用ひし本草注にも、鯧魚一に注せしものなり、四聲字苑にも
 鯧は小鮎魚とも見えたり、即是崔禹錫食經に見えし鯧ナマヅと注せしものなり、ヒシコイワ
 シとせしふべき物にあらず、またヒシコイワシといひし義不詳、ヒシコとは、イワシ國風土記に、必
 の轉ぜしふべき物にあらず、語を引結びて呼ぶれば、ヒシといふべきが故也、また大隅國風土記に、必
 志里といふ事を解して、華人の俗に、海中之洲をばヒシといふと見えし事、ウミエビ、シマアサなどいふれば、はじめ夫等
 の地方より出しを呼びて、ヒシの俗に、海中之洲をばヒシといふは、方俗よのつれの事なり、
 しむも知るべからず、又此魚は魚醬となしぬる物なれば、ヒシホイワシと云ひ

〔物類稱呼〕動物 鰯イワシはしをむら女詞也をほそ、同斷あかいわしといふ物は鹽につけたるを云、
 肥前の長崎にてからがきと云、中國にてやすらと云、

鯧イワシひしこいはしの屬也 相摸及西國にてかたくちいわしと云、又片口と計もいふ、駿河にてく

だいわしと云、上總にて小いわし、下總及常陸にてせぐるとよぶ、今按に上總の國にて小いはし

と稱すといへども、子の字の義にはあらず、又鰯の小さきをも小いはしといふ、秋をもて氣とす、是

にまがふなり、ひしこを云は小きいはしの如しと云意なるべし、又西國の産物に銀イワシひしこと云

有、是はこゝに云、鯧にはあらず、鰯イワシといへる魚の子を鹽漬になしたる物也、又鯧の小しき物を製

したるをもいふ也、なを蟹の條下を合せて見るべし、又ごまめと云物有、是はいはしにてはなし、

ひしこの干たる物也、相摸及越後奥の津輕にて干鰯と云、仙臺にてひいごと云、加賀にてかいぶ

しと云、九州にてすぼし、又片口とも云、伊賀及伊勢出雲又奥州の内にて田つくりと呼、按にごま

めとは常の稱號也、春の始に小殿原又田作りなど唱へて祝し侍る、是稻梁を植る物、干鰯干鯧を

もつてす、故に田つくりの名有、又すぼしと云るは、簀の上に干を云也、

〔浪花 街酒噂〕鶴人、小さい鰯のことをはかりといひ、大ぶりをよみといひやす、

〔尺素往來〕巡役之朝飯明日可令勤仕候、此間依霖雨美物雖難得候、中 魚類者中 鯧魚并雜魚等